Cather と失われた青春の記憶

—— *Lucy Gayheart* 考察——

志　水　智　子

Abstract

In Willa Cather's *Lucy Gayheart* (1935), the heroine, Lucy, is described as a momentary passionate musician who lacks vitality and a concrete future vision. She is far from a pioneer woman like Alexandra in Cather's *O Pioneers!* (1913) and ambitious Thea in *The Songs of the Lark* (1915). In this essay, I'd like to investigate why Cather described such a fragile and short-lived character as Lucy in her mature years as a writer. Lucy embodies Cather's view of youth, beauty and passion. At the same time, we can see Cather's trust in American pragmatic moral sense through the life of Lucy.

Lucy never tries to make good use of her gift for music to grab material success, while Gordon, her childhood friend and later admirer, diligently gets money and social success though he doesn't have any special talent. Lucy loves Sebastian without any practical future vision of marrying him. She is indifferent to her future and real life, so that she rejects Gordon's proposal.

While Gordon is described as a hard banker who embodies American capitalism, he also envies Lucy's passion and talent. He must abandon temporal passion and fragile young days to make a concrete social success and gets older and older unlike short-lived Lucy. By describing the difference between Lucy and Gordon, Cather highlights the beauty of lost youth as well as a practical way of life.

序

Willa Cather の晩年の作品である、*Lucy Gayheart*（1935）においては、刹那的な情熱のままに生き、現実の生活力に乏しいヒロイン Lucy の短い人

生が描かれる。Lucy には、Cather 文学における人生の「開拓者たち」のような自ら人生を切り開く能動性はなく、例えば、*O Pioneers!*（1913）の Alexandra、*My Ántonia*（1918）の Ántonia、*A Lost Lady*（1923）の Forrester 大尉のように、困難に打ち勝って自分の社会的な地歩を築く精力はない。また同じく音楽家としての人生が描かれてはいても、Lucy は、*The Song of the Lark*（1915）の Thea が持つような野心や向上心、社会的成功からは程遠い資質を持つ[1]。

Joseph Henry Jackson が Lucy を、“another lost lady” であると指摘するように、Lucy は確かに人生に大いに迷い、自分の方から Harry Gordon のプロポーズを断っておきながら彼が別の女性と結婚したことを恨むなど、時に理不尽で我儘な側面も備えるが、*A Lost Lady* の Marian や、*My Mortal Enemy* の Myra が共有する拝金主義的な価値観には全く関心がなく、その恋愛にも計算や将来性が伴わないのである。また、だからといって Lucy は、*Shadows on the Rock*（1931）における Auclair 父娘のように、与えられた環境や生き方に徹する受動的人生を充実させることも、師匠 Auerbach のように音楽の高みを目指すことにとらわれず平凡な日常に幸福を見いだすこともできない。

このように Lucy は Cather 文学における人物類型の系譜の中では独特な存在と考えられる。彼女の生き方には合理性や計算がみごとなまでに欠如し、名実ともに現実に耐えることが出来ない。作品出版時には低い評価も多く、例えば L. M. はこの作品を “disappointing” であるとし、William Troy は “not the best writing” であり、“a source of grave discouragement” だとこき下ろし、Stephen Vincent Benet は “This is neither the best nor the most solid of Miss Cather’s novels . . . .” と言い切る。Cather はなぜ作家としての円熟期かつ晩年期にこのような物理的にも社会的な地歩においても儚い女性を描いたのだろうか[2]。Milton Meltzer は、Cather が手首を痛め気力をなくしていた時期の作品であるゆえに、Lucy

の生き方にも強さがないと分析するが[3]、本稿では、Lucy を、Cather の若さや美、情熱といった概念についての考えを体現させる一つの試みとしての人物ととらえ、Lucy と Lucy の思い出を持ち続ける人物の人生によって Cather が示唆するものを探ると同時に、当時のアメリカ中西部の物質主義や拝金主義の源にあると考えられる、アメリカ的な道徳意識について考察していきたい。

Ⅰ：Lucy の幸福観

まず、時間と変化を超越するものの魅力とそれを追う Lucy の幸福観について考察する。Haverford の町で時計屋を営むドイツ系アメリカ人の Jacob Gayheart とその娘 Lucy は陽気な性格と音楽への愛好心を共有する。父は商売が上手くいかないことはいっこうに気にせず、経済的な成功には縁はないが趣味を生きがいとし、人生を幸福なものととらえることが出来る。娘の Lucy は音楽に才能があるが、“... too careless and light-hearted to take herself very seriously. She never dreamed of a ‘career.’”（7）[4] と描かれるように野心や名誉欲といったものがまるでない。彼女は運よく自分に備わった才能を物質的な成功を手にするための道具として使おうとはしないのである。

Lucy と対照的な生き方をする Gordon の方は、目立った才能や趣味はないのだが、野心と努力、実業に必要な計算力によって経済的成功と社会的地位を手に入れる。また同じ音楽家であっても音楽の才能を実利と名誉に結実させる Thea と違って Lucy は自分の才能に目的をもって磨きをかけることはせず、ただ音楽を愛するためだけにそれを使い、衝動的な恋に陥る。彼女の音楽愛も恋も、現実の社会生活において目に見える結果や成果、例えば結婚といったような将来設計をもたらしはせず、彼女も何らかの成果を求める気持ちは微塵もない。それどころか、壮年の歌手 Sebastian への恋は、Lucy が Gordon のプロポーズを受諾するチャンスを阻むことになり、ひい

ては Lucy の現実生活における将来設計の可能性や故郷の町においてありえた社会的アイデンティティーを奪うことになる。このように長期的展望を一切持たない Lucy の現実生活が、彼女が溺死せずとも彼女にとって実体のないものとなっていくのは当然のことと考えられよう。

Lucy と歌手の Sebastian との恋は、短くプラトニックで将来性もないまま、二人の相次ぐ溺死によって儚く終わる。Sebastian は若くなく、存在感や名声を備え、脚光を浴びる歌手であるのに対し、Lucy は若く無名で彼の陰に回る練習用の伴奏者であり、二人の恋は一見、互いにないものに惹かれる相補的な関係に起因するように見えるが、二人の死が象徴するように、彼らの生き方には非常に類似性がある。歌手として名声を得ている Sebastian は *The Song of the lark* の Thea のように音楽家として勤勉に努力し、成功を掴んだ人物のはずであり、初対面時の Lucy にとって彼は眩しく雲の上の存在であるかのように感じられる。ところが Lucy は彼と親しくなるにつれ、“... he was disappointed in something — or in everything.”（56）と察する。Sebastian は自分の青春が失われたことをむなしく感じると同時に、これまでの自分の生き方に自信を持つことが出来ないでいる。必ず過ぎ去るべき青春や実体のない美や希望を愛する Sebastian は、Lucy と同じく物質主義的な価値観では測ることのできない幸福観を持っていると言える。

Sebastian が長期の演奏旅行に出かける際に、Lucy は再び彼に会えない予感を抱く。この場面は全知の視点によって、“They were going to lose something. They were both clinging to it and to each other, but they must lose it.”（134）と描出される。この描写は、彼らがそれぞれ何一つ確固としたアイデンティティーを持っているとは感じていないゆえに、互いを掴むためのつかみどころがないという印象を表現している。それぞれが確固とした幸福も、二人の将来を築くための基盤を持たないまま、別れようとするゆえに、Lucy は互いが互いを失うことを察知するのである。Sebastian は頻繁に移動して音楽活動をする生き方ゆえに、特定のコミュニ

ティーに根差した自分のアイデンティティーや家族や友人といった深い人間関係が得られないことを次のように嘆く。

> . . . everything seemed to have gone wrong. Life had so turned out that now, when he was nearing fifty, he was without a country, without a home, without a family, and very nearly without friends. Surely a man couldn't congratulate himself upon a career which had led to such results. He had missed the deepest of all companionships, a relation with the earth itself, with a countryside and a people. (83)

すると Sebastian の歌手としての社会的成功は彼に自信も幸福ももたらしていない。このような Sebastian の自己存在の希薄感に対応する Lucy のむなしさは、Sebastian の伴奏者として彼のそばにいる時間に心酔しながらも、演奏旅行に行く彼との別れに不安感を覚える次の場面において描かれる。

> There was nothing sure or safe in this life she was leading. She had been sailing along in the air, like a little boy's kite; the wind drops, and the kite comes down in the dirty street, among the drays and roller skates. (124)

Lucy は音楽家として無名であり、地位も名誉も備えないが、Sebastian と同じく、社会的地位を得ることに幸福を見出すことができない人間である。彼女は、妻帯者であり、一時的に共に仕事をしていることが分かっているはずの Sebastian と、ただ音楽を演奏するという、何の先の保証もない関係に至福を見いだすのである。また Lucy との出会いを、"Ein schoner Stern ging auf in meiner Nacht." (136) と、すなわち、「美しい一つ星が私の夜空に出てきた」と表現する Sebastian もまた、彼女の存在そのものに喜びを感じるものの、具体的な彼女との将来を計画することはない。こ

のように二人は刹那的で儚い幸福感、時とともに失われる美に喜びを感じる点において類似するのである。このような二人の恋が現実において長く続かないことは、*O Pioneers!* における、Alexander の弟 Emil と、人妻 Marie の情熱的な恋が現実的な計算も将来性もなく儚く終わることと類似する。

二人が時間の経過によって変化するものを超越するような空間を味わい、自分たちだけの幸福感に浸る様子は Lucy の視点から次のように描かれる。

> For two hours, five days of the week, she was alone with Sebastian, shut away from the rest of the world. It was as if they were on the lonely spur of a mountain, enveloped by mist. They saw no one but Giuseppe, heard no one; the city below was blotted out. (80)

この様子は *The Professor's House*（1922）の中で、Tom Outland が一人メサの上に座り、時間を超える大きな存在に包まれるような気分になる場面と類似し、そこにいる人物たちは通常の人間の社会生活から隔絶し、他者より「高み」にいるという感覚を持つ。Lucy にとって Sebastian と過ごす部屋の雰囲気は、"The air one breathed in that room was different from any other in the world. Lucy thought there was even a special kind of light there, which kept a soft tint of gold, though the fog was brown and the smoke hung low outside."（98–99）と感じられ、彼女は特別な幸福の時を過ごす。彼女は人生の価値をその長さによって測ることはできないことを察知し、今この時をむさぼるかのように楽しむ。こうして Lucy と Sebastian は時間や物質世界を超越できる幻想を二人で共有するのである。

このような Lucy の幸福の見出し方は、師匠の Auerbach の現実的な幸福観と比較するとその具体性のなさが際立つ。"A nice house and garden in a little town, with money enough not to worry, a family

— that's the best life." (142) という Auerbach の幸福感は、彼がアメリカ社会で現実的に生きようとしており、芸術至上主義者ではないことを表している。それに対し、Lucy は、"Family life in a little town is pretty deadly. It's being planted in the earth, like one of your carrots there. I'd rather be pulled up and thrown away." (142) と語る。ここから、長期的展望に基づく、物質的に満たされた生活よりも、一瞬の情熱や刺激を優先する Lucy の価値観が読み取れる。若くして死んだ Lucy のことを思い返す Gordon が、"Perhaps it was no great loss to have missed two-thirds of her life, if she had the best third, and had been young ...." (233) と確信する気持ちもまた、物理的な数値や時間によって測ることができない Lucy の幸福を描出していると言えよう。

Ⅱ：「成功者」が失わなければならないもの

これほど刹那的な生き方をする Lucy が、彼女とは対照的な価値観を持つ Gordon の視点から、どうしようもなく魅力的に描かれていることは意味深い。実利を重んじる Gordon は、結婚に対しても計算をすることが出来、Lucy に惹かれながらも、"He didn't like the idea of marrying the watchmaker's daughter, when so many brilliant opportunities were open to him." (23) と、頭では彼女の家の社会的地位を計算している。それなのに彼は財産や地位のある Harriet Arkwright にはときめきを感じず、彼の感性は reason によって説明できない理由で、Lucy に惹きつけられるのである。この様子は、"Strangely enough, the only girl who gave him any deep thrill was this same Lucy, who lived in his own town, was poor as a church mouse, never flattered him, and often laughed at him. When he was with her, life was different; that was all." (24) と描かれる。また後年、Lucy の死後、さらに社会的な地位を確立し、裕福になった Gordon は、Lucy の魅力を、"It was that very

fire and blindness, that way of flashing with her whole self into one impulse, without foresight or sight at all, that had made her seem wonderful to him.”（233）と分析するのである。Gordon にとって、自分にはない Lucy の無計画で不安定な、しかし純粋な情熱は、彼自身に備わる安定感や合理性がもたらす幸福をしのいで魅力的なのである。経済的に大成する Gordon を物質主義における成功と合理性の体現者と考えると、そのような彼が物質主義や合理性によって測ることが出来ない人生観や幸福を認める気持ちは、物質的な成功をめざして前進するアメリカに常に付随する文化的な渇望やコンプレックスを象徴するかのようだ。Gordon の生き方は、勤労を重視するピューリタニズム的な価値観も、物質主義に傾倒していく近代アメリカ社会の価値観も示唆するが、同時にアメリカ人の成功や幸福といった概念についての「迷い」もまた示していると言えよう。

偶然の出会いに情熱的に喜びを感じたり、他者から働きかけられ動かしてもらうことはあるが、自らの人生を戦略的に社会的成功を目的として設計しようなどとは思わない Lucy は、受動的である[5]。彼女は父同様、“never got anywhere”（200）と描かれるように、何一つ成し遂げることができないのである。Cather はその作品群において、群像劇風に、主役以外の「脇役」の人物の人生にも焦点を当て、紙面を割いて詳細を描く傾向にあった。例えば *The Professor's House* における Augusta も、この作品における Sebastian の世話をする Giuseppe も、「脇役」でありながら「主役」の人物にはない存在感を備え、主役とは違う価値観や人生観を持つ。Lucy はタイトルにおいてはこの作品のヒロインでありながら、華やかな脚光を浴びる Sebastian の陰に回る練習時伴奏者である点においても、彼女の死後、Gordon に物語における視点を取って代わられる点においても「脇役」的人物なのである。この点について、Joseph R. Urgo もまた、“Despite its title, however, the novel is not about Lucy Gayheart in the sense that her consciousness or development is what ultimately matters.

The narrative is more concerned with what the town of Haverford will do with Lucy's survival into the future as an idea or an image."（115）と論じ、Lucy が主人公ではないことを指摘している。脇役的人物の人生を描き出す Cather の手法からは、社会的な成功者にはない彼らの価値観に対する Cather の敬意が読み取れる[6]。彼ら脇役の魅力は、合理性や物質主義に対する Cather の反意を表しているとともに、失敗や成功という言葉で定義できない個々人の人生への興味と敬意がうかがえると考えられる[7]。

Lucy の人生を回顧する Gordon は彼女のことを、"something eager, alert, happier than he could ever be."（234）であったと思う。短い恋を失い、若い命を落とした Lucy に比べ、健康でより長い人生を生き、社会的地位も財産も手に入れた Gordon の方が物質的に恵まれているはずなのだが、Gordon がこのように Lucy の人生を眩しく感じる理由は、彼や Cather 文学における「成功者」たちがその社会的、物理的成功を勝ち得て年齢を経ていく中で、捨てざるを得なかった喜びや、時とともに必ず失う若さと美を体現しているからなのである。Cather 自身も含め、精力的に仕事に打ち込み、人生を切り開いて自分の地歩を得る「成功者」たちは、そのための年月をかけた努力と結果としての加齢を経験する。成功者たちは、若さに加え、無計画な欲望のための衝動や実利に結びつかない趣味、美的感性を、欠いているか捨てなければならないのである。Gordon には実は繊細な感性もあるからこそ、彼が物質的成功のために失った、Lucy が体現する若さと情熱はうらやましく感じられるのである。Lucy の、そして Cather 文学における「脇役」的人物の魅力とは、社会的物質的成功をめざす人間が生き続け成功を得るために必ず捨てていく価値観の存在感、弱く儚いが美しい感性の価値を逆照射しているのである。

Ⅲ：時間と野心が生み出すもの

それではこの作品は Cather の物質主義への反発心と、「成功者」たちの後ろ向きな自己否定を表現するものかというと、そう簡単には片付かない作者の意図が読み取れる。次にこの作品が単純に時の変化を超越する Lucy の若さと情熱をたたえ、物質主義を否定するものとはなっていない点について考察してく。

Lucy は何の計算もない、一時の情熱による直感的な生き方をすることを好むのだが、彼女の視点から、勤勉とそれに伴う時間と変化、計画的な野心がもたらす安定に対する憧れもまた描かれている点は意味深い。Sebastian は定住できるコミュニティーや人間関係の絆を自分に欠ける幸福の根源的要素と感じたが、まさにそれらを備える Gordon は、故郷の Haverford の町に貢献し、そこに根を下ろして生きており、Lucy にとって安定した彼の生活力と理性は心強く感じられる。この様子は、同じ町に住んでいても趣味の音楽バンドを育成したり、何の役にも立たない天文学を研究している父と違って、Gordon がその父親とともに費用を折半して設置しようとしている Harverford の新しい “street-lamp”（20）について Lucy に話しているとき、彼は彼女にとってとても頼もしく感じられ、“Such easy self-possession was very reassuring to a mercurial, vacillating person like Lucy.”(20) と表現される場面からも読み取れる。だからといって Lucy は Gordon ほど実体を重んじる安定した生き方はできず、Sebastian への何の将来性もない恋心を理由に具体的な結婚を提案する Gordon のプロポーズを断ってしまう。ところが儚い恋を失って故郷へと戻ってきた Lucy は、それまでの行動と全く矛盾することであるが、自分が拒絶しすでに既婚となった Gordon のやさしさを求め、それを心の支えにすることを望むのである。

また、芸術家の人生が描かれる作品でありながら、禁欲的に音楽の水準を高めることを追求する人物は描かれず、芸術よりも現実の生活を重視する価

値観が重ねて描かれる。まず、Lucy の師である Auerbach は、彼女が Gordon と結婚することを望んでおり、“You will learn that to live is the first thing.”（142）と語る。Auerbach にとって“live”ということと音楽活動は別のものであり、あくまでも“live”という状況があったうえで音楽は成り立つのである。また、Lucy を幼い頃から知る Haverford の Mrs. Ramsay は、“Make it as many as you can, Lucy. Nothing really matters but living.... Accomplishments are the ornaments of life, they come second.”（174）と諭す。彼らの主張は非常に類似しており、Lucy は二度にわたって芸術そのものを生きがいとすることのあやうさを諭される。彼らにより、音楽芸術は演奏会の収益やピアノ教師としての授業料といった実益を生み出す道具となる場合以外は、合理性や物質主義に根差す人間の経済生活が二次的に生み出した、人生をより豊かにするための装飾品であることが強調されるのである。人間の「生活」の実態を無視した芸術美の追求や情熱は、よって立つべき人生の実体の喪失を招くのであり、文字通り「生活」を失う Lucy の最期がこのことを体現する。

さらに、永遠に若いまま人々の記憶にとどまることになった Lucy の魅力とともに、加齢に対する肯定的な描写が見られる点も意味深い。Sebastian を失い、故郷に戻った Lucy が、父や姉とともにオペラを鑑賞する場面において、彼女は一人の若くないソプラノ歌手に注目する。Lucy は彼女の歌は技術的にはレベルが低いと思うが、“... there was another kind of sweetness; a sympathy, a tolerant understanding.”（191）と描かれるように年齢ゆえの美と理解力が備わっていることを感じ取る。さらに Lucy は、“Singing this humdrum music to humdrum people, why was it worth while? This poor little singer had lost everything: youth, good looks, position, the high notes of her voice. And yet she sang so well!”（191-192）と確信する。このソプラノ歌手は、時間の経過とともに失った若さや美しさと引き換えに手に入れた人生への理解力によって自身

の幸福を作り出していることが読み取れる。

また、Lucy の行く末を心配する Mrs. Ramsay の様子を肯定的に見つめる、娘の Mrs. Norwall が感じる加齢についての認識は、“More like the Divine compassion. And her mother used to be so stormy, so personal! If growing old did that to one's voice and one's understanding, one need not dread it so much”（155）のように描かれる。この場面においても、年齢を重ねて生きていくことが、自身や他者の人生に対する受容力を高め、人生を肯定する力を高める場合があることが示唆される。

そして何よりも Lucy とは正反対の価値観を持ちながら、互いにすれ違いつつも心を寄せた Gordon は、Lucy の死後彼女よりもずっと長く生き、55 歳になるからこそ、彼女との辛い思い出を、“Lucy was the best thing he had to remember.”（234）と描かれるように、時の経過の働きによって最も楽しい思い出に変えることができる。若さの喪失を受け止めることができず青春の喪失を自らの不幸の一つととらえる価値観が必然的に Sebastian を不幸にするのに対し、時間の経過を現実的に受け止めるプラグマティックな価値観は Sebastian よりも加齢を経験する Gordon に幸せをもたらしている[8]。セメントに残る少女時代の Lucy の足跡が象徴するように、彼に幸せをもたらした青春の日々が、現在は永遠に失われているとしても確実に存在したことを Gordon は認識することが出来るのである。

このようにこの作品の中では、Lucy や Sebastian の短い恋やアイデンティティーの不安定さに引き立てられて、実利的で現実的な生活と時間の変化がもたらす幸福の可能性もまた際立っているのである。Gordon が体現する、時に冷酷な資本主義であると同時に地域社会に根差し、地歩を固めた合理的で安定した生活が、魅力的に描かれることの意味を考察すると、アメリカ社会とアメリカの精神文化に対する Cather の両義的な意識が読み取れると考えられる。つまり、アメリカに移民した開拓者たちにとって勤労とその結果

としての金銭や社会的成功は敬うべき徳の象徴であり、宗教的にはピューリタニズムにおける徳性でもある。資本主義社会において金銭や社会的成功が過度に追い求められると、人は利己的な物質主義に陥る可能性があるが、実業と勤労を徳と考える価値観はもとをたどれば受け継がれていくアメリカの国民性の一つでありアメリカの精神文化と考えられる。そしてこの作品においては、物質主義に反発しているようでいて、その物質主義のもとにあるアメリカの精神文化に対する Cather の肯定的な意志が見え隠れする。Gordon が資本主義社会における強さと Lucy を認める感受性を同時に持つという器の大きさを備える様子は、Gordon が体現するアメリカ精神という文脈でとらえると示唆的である。Frances W. Kaye は、“He［Gordon］can learn from Lucy the vital excitement in life that makes her attractive, but she cannot learn his strength.”（181）と論じる。Kaye の指摘は、Lucy の体現する感性や芸術文化の限界と、アメリカ精神の可能性を示唆すると考えられるのではないだろうか。

このように壮年期の Gordon の心の安定の描写は、Sebastian が体現するヨーロッパ芸術の魅力や Lucy の情熱と才能にまさる、アメリカの精神文化が生んだ実利的で合理的な生き方に備わる魅力を示唆する[9]。ヨーロッパ的な芸術文化よりも、アメリカの平凡な実業を重んじる生活文化の方により徳と幸福が存在するという構図は、Cather の先輩作家である Henry James が好んだ19世紀末のヨーロッパ文化とアメリカ文化についてのフォーミュラを彷彿とさせる。例えば James の初期の作品である *Roderick Hudson* において、ピューリタニズムに根差す土地と価値観を捨て、ヨーロッパで芸術的理想を限りなく追求する Roderick が生活のリズムも生命そのものも失う様子は、Lucy の人生と重なる。アメリカ資本主義社会で成功をおさめた Gordon が、銀行家として時に利己的で冷酷な行為をしながらも、結局のところ繊細さや寛大さを併せ持つ人物として描かれる点に、物質主義のもとにあるアメリカ的な価値観に対する Cather の評価の意志が読み取れるのであ

る[10]。

Ⅳ：自らに欠けるものを求める人間の「迷い」

才能を備えた短く情熱的な芸術家としての人生、計画性と努力に根差した実業家としての人生、これらはこの作品の中でそのいずれかがより幸せなものとして描かれているわけではない。Lucy は才能にあふれ光に包まれているかのように見える Sebastian と惹かれあう関係を、“It was an accidental relationship, between someone who had everything and someone who had nothing at all ....”（64）ととらえ、自分にはない芸術家としての能力を、Sebastian にみとめて憧れる。だが Lucy がすべてを持っている人だと思っている当の Sebastian の方は、自分を空虚な存在と感じており、Gordon のような地域社会とのつながり、家族、家などを持つ人生こそが幸せであると考える。そしてそれらをまさにしっかりと手中に収めた人生を送る Gordon の方は、Lucy が持つ何の実益をも生まない情熱や美しさにどうしようもなく惹かれる。最後に Sebastian との短い恋を失った Lucy は故郷で自分の人生を理解してくれる相手を求め Gordon の優しさを求めるが、彼の不親切さによって彼女の希望は拒絶される。このようにこれら三人の人物は自らに欠ける資質を察知しているがそれらを手にすることはできない。彼らが互いに手に入らない資質を求める姿を通して、どのような人生を選ぼうとないものねだりをし、生き方に迷う、普遍的で現実的な人間の性が浮き彫りになるのである。この作品においては、単純に精力にあふれた社会的成功者が魅力的に描かれることもなければ、アメリカ社会における金銭の追求が悪として描かれることもなく、アメリカ人の価値観や迷いに対する、Cather の人生経験を積んだ時期ならではの理解力が読み取れるのである。

Gordon は、自分とは対極の生き方をする Lucy に惹かれ、若い時には実利的な計算からでなく“marry for beauty”（26）と描かれるように「美」

のために結婚しようと考えたり、壮年期には自分の成功や健康を享受しながらも、若くして死んだ Lucy はたぐいまれな幸福の人生を送ったと感じる。このような Gordon の人間性には、アメリカ社会が過度な物質主義に陥らないものであってほしいと考える Cather の意志が見え隠れする。

結論

Lucy の物語を通して、「成功者」とならない人生、実利を追う価値観の両義性、時間の経過がなしえることの両義性についての Cather の円熟期の考えを読み取ることが出来よう。

Lucy が体現するものは、Cather を含め、生き続け社会的な「成功者」となるために、必ず捨てなければならない、若さと弱さ、刹那的な情熱、合理性では測ることが出来ない価値観の魅力である。それはまた Cather 文学における主役にならない「脇役」的な人物の魅力でもある。それは、現実に耐えることが出来ず、必ず失われるからこそ美しく、晩年期を迎えた Cather にとっても老いゆく成功者にとっても魅力を放つのである。

また Lucy の魅力が Haverford の町の人々や Gordon の記憶の中にいつまでも生き続け、存在感を持ち続ける状況は、物質主義や進行していく資本主義社会に対する Cather の反発心を示唆していると考えられる。しかし物理的な成功を掴む生活、勤勉や実務がもたらす経済的な安定、若さをうしなっても時間の変化がなしえる人間の洞察力などの魅力もまた同時に描き出されるのである。Lucy と Sebastian のような芸術家と、Gordon のような実業家が、たがいに自らに欠ける資質を魅力と感じることにおいては、芸術文化を愛しつつも社会的成功を目指し経済的に上昇することを志向するアメリカ的価値観に対する Cather の肯定的な意志を読み取ることが出来よう。

さらに、若さという美や幸福を奪いはするが、より深く長い人間関係や社会的成功、人生に対する深い理解力を人間にもたらす時間というものの二面性が強調されていると言える。そしてそのような両義的な意味を持つ時間の

流れのなかで、幸福観やアイデンティティーについて迷いながら生きるのが人間であるということも描き出される。数々の社会的成功者や失敗者、脇役を描き続けた作家としての円熟期であり晩年期であったからこそ、Cather は物質主義や合理性、時間の二面性を、Lucy と彼女を取り巻く人物の生き方によって表現しえたのだと言えよう。

備考：本稿は日本英文学会九州支部第71回大会（2018年10月21日　於　九州女子大学）での口頭発表原稿に加筆修正を行ったものである。

註

1　この点については Susan J. Rosowski も、“*Lucy Gayheart* seems the reverse of *The Song of the Lark*”（401）と指摘している。

2　Kenneth C. Kaufman は、Lucy の恋を、“not much more than a case of school girl hero-worship” と表現し、Fanny Butcher は、“In the technical sense of the word they were never lovers” と恋愛場面の希薄さを指摘する。

3　Milton Meltzer. *Willa Cather: A Biography.* (Minneapolis: Twenty-First Century Books, 2008), 136. 参照。

4　Willa Cather, *Lucy Gayheart.* (Lincoln: University of Nebraska Press, 2015), 7. 以降この小説からの引用はすべてこの版により、ページ数のみをカッコ内に記す。

5　Susan J. Rosowski はこのような彼女の受動性、自主性のなさを、“Lucy Gayhesrt is unable to take responsibility for her world, her language, and her self.”（399）と表現する。

6　檜原美恵はこの作品を、「何らかの存在感のあった人物を忘却の後方に追いやらないで、その人の生きていた時の姿をどのように捉えるのか、また、その人の持つイメージがどのようなシンボルとして定着する可能性があるのかを描き出した作品」であると考える。（檜原 16）

7　この作品においても物理的な「成功者」とならない Lucy の魅力があつかわれる点について、Joseph R. Urgo は、“According to the formula of ambition and migration, Lucy is a model failure. Nonetheless, the novel is more than the trashing of a weak young woman.”（115）と論じている。

8　滝沢真理子は、Sebastian の不幸の原因を、“Sebastian does not want to

accept the passing of time, but rather wants to avoid reality and stay young, being with Lucy." (Takizawa 162) と述べる。

9 Cyril Connolly も Gordon の体現するアメリカらしさと Sebastian が体現するヨーロッパらしさを比較し、"We are then shown in an epilogue that Harry's love was really greater, that his whole life was determined by her death, that his clumsy patronizing American emotion was something finer than Sebastian's polished European appetite." と指摘し、アメリカ文化に対する作者の評価を読み取っている。

10 Gordon が人間味豊かに描かかれる点については Charlotte M. Meagher も、"Of all the characters, Harry Gordon is perhaps the best drawn." と指摘する。

Works Cited

Benet, Stephen Vincent. "The Artistry and Grace of Willa Cather: Even in Lesser Books She Is a Superb Stylist." *New York Herald Tribune Books* 4 August (1935): 3.

Butcher, Fanny. "Willa Cather Writes Idyll of Spiritual Love." *Chicago Daily Tribune* 3 August (1935): 11.

Cather, Willa. *A Lost Lady*. London: Virago Press, 2006.

-----. *Lucy Gayheart*. Lincoln: University of Nebraska Press, 2015.

-----. *My Mortal Enemy*. New York: Vintage Books, 1954.

-----. *O Pioneers!*. New York: W. W. Norton & Company, 2008.

-----. *Shadows on the Rock*. Lincoln: University of Nebraska Press, 2005.

-----. *The Professor's House*. New York: Vintage Books, 1973.

-----. *The Song of the Lark*. New York: Signet Classics, 2007.

Connolly, Cyril. *New Statesman and Nation* 10 (1935): 11.

Jackson, Joseph Henry. "Youth's Valorous Way with Life is Theme of Willa Cather's Latest." *San Francisco Chronicle* 4 August (1935): 4D.

Kaufman, Kenneth C. "Truncated Destiny." *Christian Science Monitor* 31 July (1935): 12.

Kaye, Frances W. *Isolation and Masquerade*. New York: Peter Lang Publishing, 1993.

M, L. "Miss Cather's First Novel in Four Years." *Kansas City Star* 10 August (1935): 14.

Meagher, Charlotte M. "Romance at Noonday." *Commonweal* 22 (1935): 534.

Meltzer, Milton. *Willa Cather: A Biography*. Minneapolis: Twenty-First Century Books, 2008.

Rosowski, Susan. "Writing Against Silence: Female adolescent Development in the Novels of Willa Cather." *Willa Cather Critical Assessments*. Ed. Guy Reynolds. Mountfield, East Sussex: Helm Information, 2003. 390-406.

Troy, William. "Footprints in Cement." *Nation* 141 (1935): 193.

Urgo, Joseph R. *Willa Cather and the Myth of American Migration*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1995.

滝澤真理子「Cather's Strategy in Lucy Gayheart — Life and Death」『論集』第24号 (2003)、156-167.

檜原美恵「忘却への抵抗— Lucy Gayheart の一解釈—」『外国文学研究』第83号 (1988)、11-35.